

《修士論文要旨》

## 石垣普請の考古学的研究

坂 本 俊\*

城郭石垣の研究はこれまで多くの研究がなされてきた。しかし、過去の研究は年代観や方法論などに問題があるとともに技術史的研究がほとんど行われてこなかったため、石造物研究に比べ大いに立ち遅れているのが現状である。近年では、城郭石垣の石材産出地である石切場に着目した調査・研究が盛んになってきており、採石から石積みまでを流通という観点で捉えながら採石技術や石材調達の実態が徐々に明らかとなっている。これらの一連の調査は、近年ようやく端緒についた段階であり成果も十分に揃っているとは言えないが、城郭石垣の発掘調査・研究成果と組み合わせて石垣普請と捉え直すことで考古学的観点から新たな実態像を提示できると考えた。本論では、城郭石垣の変遷と採石技術の一端を示す矢穴の変遷を明らかにし、両者がどのように関わりながら歴史の変遷を辿るのか検討した。

検討対象はチャシとグスクを除く北海道から九州までの9地方143地点の城郭で、中世から近世までの発掘調査成果を中心とした構築時期や普請の年代が明白な石垣で分析を行っている。分析の方法は、研究史と石垣の構造体を再検討した結果、石材の加工度、裏込めの有無や胴木の有無、隅角部の有無、そして石垣の高さと配石の仕方を用いることが有効であると考え、これらの組み合わせによって計8形式に分類したうえで、地域と織豊系城郭ごとに各形式の変遷を追っている。

地域を視点とした石垣の変遷では、城郭における石垣の採用時期に違いが見られると同時に加工度の発展に時期差が存在することが明らかとなった。構築方法については、地形や造成を施さずに直接石材を積み上げる方法が共通してみられたが、基礎地形や造成は施さないものの石垣背後に掘方を持ち、土砂を充填しながら石垣を構築する方法も各地で散見された。この構築方法の由来や展開については今のところ結論は出ていないが、栗石と土砂で構成される裏込めを背面に持つ石垣が展開していくと消滅する傾向が伺える。また、石材の加工度は、裏込めを伴う石垣の出現と軌を一にして発展しており、隅角部の発達や築石に割石を用いる割合が増加するなどの状況は17世紀前葉段階に全国的に出現することがわかった。

このような地方の様相に対し、織豊系城郭では石垣を採用した段階で裏込めや基礎地形を明確に施しており、近世城郭と同様の技術で石垣を構築している。大きな違いは石垣の高さで、小牧山城では段状を呈する低石垣となっているが、安土城では低石垣と高石垣の併存状況を見て取ることができ、16世紀末葉段階までこのような状況が続く様子を看取できた。それ以降は、高石垣を指向するものが主体となるため、低石垣から高石垣への転換は一気に行われたわけではなく、極めて緩やかであったことがわかった。

平成23年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

加工度については、天正11年（1583）の豊臣期大坂城や天正13年（1585）の八幡山城では少量ではあるが割石が認められた。しかし、石垣の主たる構成は自然石であり意図的に面取りを施したという意識は薄いように感じられる。

加工度が一挙に進展するのは慶長元年（1596）の伏見城普請以降であると考えられ、角石と築石の差別化がなされるとともに割石や粗割石を主たる構成にしており、明らかな面取りの指向を伺うことが出来た。このような状況は採石技術にも反映されていることがわかった。伏見城普請以前は観音寺城技法と呼ばれる分割予定線に対して一部のみ矢穴を穿つ方法がとられていたが、この技法では分割可能な原石の規模も限られてしまうため、一定規格の石材をとる事が難しい。しかし、伏見城普請段階で複数回に展開させながら分割していく連続矢穴技法の採用が見て取れ、角石と築石の分離など石材の規格化と同調して採石の技法も変化させている様相がわかる。

以上のように、修士論文では石垣に用いられる石材の加工度の増加と採石技術が相互に関連して変遷していくことを伺うことが出来た。生産地と消費地の関係にある石垣と採石技術を相互に比較検討することは、流通システムの一端を明らかにしていると同時に石垣の構築に関わる要請に対して矢穴類型を増やし、法量をできるだけ厳密に穿つといった石工の工夫も明らかにできるのである。

本論では、具体的に変遷の背景や要因まで考察することはできなかったが、石垣と採石技術を組み合わせて検討することで可視できる石垣の発達とバックグラウンドとなる採石技術が相互関連していることがわかり、検討方法として有効な手法であることは明確にできたと思う。このような手法で事例をさらに増やしていけば、考古学的事実から石垣普請の実態を明らかにすることは十分に可能であると考えている。